
除去師

正宗。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

除去師

【Nコード】

N3734A

【作者名】

正宗。

【あらすじ】

霊感が強すぎるがためにみえてしまうものがある。その中には人間に害を与えるものもある。主人公は“みえるがために”それらの除去を任された。

巻【遭遇】

某月某日某所。

僕はある仕事を終えて学校から帰る途中だった。

「わっ」

ふと後ろから背中を軽く押され、僕は若干前のめりになる。

「驚いた？」

振り向いた僕の目線の先にいた幼馴染みでくされ縁の安達 虎徹（あだち こてつ）が白い歯を剥き出しにして笑っていた。

「いや、全然」

僕は即座に答えた。

「なんだよー。お銀のいかにも疲れてるって感じの背中見て元気付けようとしたのに」

“お銀”とは僕の事だ。幼い頃から虎徹のこの呼び方は変わっていない。村雨 銀次（むらさめ ぎんじ）、僕の名前だ。

虎徹は外見通りの明るい性格で正義感が強い。昔からそうだ。弱いくせにガキの頃のイジメっ子に立ち向かう。まあ僕は当時そんな虎徹の保護者的な役割も担っていたわけだが今は違う。

虎徹と並んで帰り道を歩く。

「で、今日はどうだった？」

虎徹は今日の仕事の事を聞いているようだ。

僕は数秒考えてから答えた。

「まあまあヤツだったかな」

虎徹は間髪いれず聞いてくる。

「んで、報酬はいくらもらえるの？」

左手の人指し指と中指を立てて虎徹に見せた。

「に？に、に：二万？」

僕は黙って首を縦に振る。

「二万かぁ。そんならしいヤツならどうってことなかったね」

もう一度首を縦に振る。

「お銀もこの仕事にだんだん慣れてきた感じだね」
虎徹はそう言って僕の肩を軽く叩いた。

仕事か……。

僕がこの仕事を始めたのは二年前だ。近所で次々と人が行方不明になるという不可解な事件が起きた。いなくなる人はまだ小学生になる前の児童と若い女性に限られていた。

当時高校に入学したての僕といえば学校の部活動には所属せず、俗に言う帰宅部員だった。

ある日の帰り道僕はある光景を見てしまった。

いつもの様に学校から自宅に帰る途中。

帰り道ふと普段は目もくれないビルとビルの間、暗い隙間。僕は何だか違和感を感じた。

何かいる。

人間ではないが猫や犬といった動物でもない。

何か、不気味で背中に悪寒が走る感じのものだった。

見てはいけない。

僕は根拠はないが直感でそう感じた。しかし怖いもの見たさと言うのだろつか、そんないつになく湧いてきた好奇心を抑えられずにその“何か”に目を向ける。

異形。

日が暮れる時間帯ではあるが辺りはオレンジ色に染まり明るい。道

行く自動車もライトはつけていない。

しかしその隙間だけが異様に薄暗く、逆にその異形の気配、姿を浮き立たせる。

(……何だ?)

よく目を凝らしてみると、だんだんその“何か”は見えてくる。

妖怪、鬼、般若、死神、化け物…。

いろんな怪の姿が浮かんでくるが、どれにも当てはまりそうでどれにも当てはまらない気がした。

その異形の怪は、身体中から細い管のようなものを足下の物体に伸ばしている。

(…人つ…)

足下の物体は人の形をしている。表面は焦げたように黒ずんでいるが、髪の毛にあたる部分と胸にあたる部分を見れば女性だということがわかる。

異形は僕に気が付いたのか、変わり果てた女性を引きずりながらゆっくりこちらに向かってくる。

(マジかよ…)

僕は無意識に一步後退していた。異形は隙間から堂々と現れその姿を鮮明にさせる。

(…まずい、他の人達を逃が…)

すると右方向からサラリーマン風の男性が歩いてきた。その進路の直線上に異形がたたずむ。

(やべえ…)

僕は助けに行こうとしたが、あるうことが足がすくんで動けない。もう異形は目の前だ。

「
危ないっ
!!」

式【鸚鵡】

しかしその異形をすり抜けて行くサラリーマンを見て僕はあっけに取られた。

（見えてない…??）

僕の声に少し反応を示しながらもサラリーマンは去っていった。

（今までとは違うな）

今まで。

僕は小さい頃から靈感があった。

初めはぼんやり見える程度だったが、時が経ち成長するにつれてハッキリと見え、さらに色々な種類の霊も見えるようになり今に至る。いつものように見える霊とかその類のものは大抵、犬や猫といった動物やこの世に未練を残しまだ成仏しきれない人のもの、恨みや怨念を晴らすべく現世に残る人などだった。

しかしこの場合のケースは違っていた。

いつもとは違い、霊ではないと感じた。

じゃあ何だろうか。

もしかして実在する生物なのか。

そんなわけがない。

こんな身体からウネウネと管を出す二足歩行の生物がいるはずがない。

「まさか…ほんとに化け物…」

無意識に声が出ていた。

「いや、化け物と言うと少し違うかな」

ふと背後から若い女性らしき声がした。

僕の背中には地域の暴走族によって

スプレーで落書きされた煉瓦造りの壁しかないはずだ。

僕は勢いよく振り返る。

何もいない。

が、視線を壁の上方に向けると一羽の黒い鳥がこちらを見ている。
カラス、ではない。

目を凝らして見るとどうやらその鳥は黒いオウムだった。
今時珍しい。

僕は場違いな発想が浮かんできた。

「“ソレ”は化け物じゃなくて・・・いや化け物か？」

オウムは喋りだした。

「化け物って一体何なの？ まあいつか」

誰に問いかけてるんだよ。

口には出さないでおいた。

オウムはそう言うのと僕の肩に飛び降りた。

「一言で言えば妖怪かな。私達の専門用語で言えばムシね」

何なんだこのオウムは。

僕は今更になってそう思い始めた。

「あら、何だこの鳥はってな顔してるわね」

鳥のくせに少し嘲る様に笑ったように見えた。

・・・鳥のくせに。

「詳しい事はこのムシを除去してから。ほら、来たわよ」

そう言っただけオウムはまた壁へ飛び移る。

そして視線を異形に移すともう目の前に異形が迫っていた。

でかい。

ゆうに3mは超えているであろう体躯。

異形は唸り声のようなものを発しながら僕の方へ倒れ込んでくる。

（・・・逃げなきゃ！）

参【卵】

僕は僕に倒れこんでくる異形を
左方に跳び紙一重で避けた。

「お、なかなか良い身のこなしね」
オウムが偉そうに言う。

助けてくれよ。

いや、オウムに何ができるんだって話か。

僕は目だけでオウムを見、すぐに視線を異形に戻す。

がああああ

唸っている。

とりあえず行動が遅い。

自分から倒れ、それから起き上がるまでに数分かかっている。

しかし僕はテレビで見たりする正義のヒーローじゃないし

特殊な能力を持っているわけでもない。

まあ余計にいろいろ見えはするが。

「さあ、お手並み拝見ね」

何の事だ。

僕にどうしろと言うのだこのオウムは。

さっきのサラリーマンのケースで

物理的な攻撃は無意味だと推測される。

そっとなったらこの生身の人間に残された手段は一つ。

僕は踵を返し駆けた。

「あ、コラ、逃げる気!？」

オウムは慌てて羽ばたき僕の服を小さな両足で掴んだ。
たかがオウム、これしき……。

動かない。

全速力で走っているはずが風景は止まったままだ。

足はいつになく機敏に動いている。

が、前には進まない。

というか微妙に宙に浮いている感じがする。

こいつか。

服を掴むオウムを僕は睨みつけた。

「さあ、倒すのよ。全力で」

もはや意味が伝わってこない。

「何で僕があんなのを……」

「君には見えてるじゃないの」

「見えても倒せません」

何故か敬語になった。

「別に徒手空拳で倒せなんて言ってないわよ」

僕はとりあえず空回るだけの両足を止めた。

「じゃあどうやって……」

そこでオウムはようやく僕の服を離れた。

その隙に逃げてやるうかと考えたが二の舞だと判断し断念。

オウムは僕の目の前に着地した。

「この中から選んで」

そついうとオウムは踵を返し僕に背を向ける。

すると懷から三つほどの卵が転がってきた。

一番右には眩いばかりに光っている卵、真ん中は唐草模様の卵、

そしてやけに細長くくねくねとした卵が一番左に。

どれも普通の卵ではなく、中身も普通ではないことが分かる。

「何だ……これは」

「好きなのを選んで割ってみなさい。そうすれば自ずと答えは出てくるわ」

オウムの後ろでは異形が今にも立ち上がりそうになっていた。

僕は左利きだから取りやすかった細長い卵を手を取った。

「ど、どう割るんだこれは」

「適当に割りなさい」

なんて適当なオウムなんだ。

「じゃあ・・・」

そう言つて僕は先端部分を地面に二度叩きつけた。

ぼん

変な煙と共に現われたのは、シャープペン程の長さで単一電池程の太さの棒状のものだった。

（な、何だこれ）

僕はそれを手に取り呆然とする。

「あら、あなたは接近戦タイプね」

こんなものでどう戦うというのか。

その前にまず僕はもう異形を倒さなければならなくなっている。

こんなもので。

僕は左手に持ったそれを見つめる。

「強く握り締めてみなさい」

絶望に浸っている所を呼び戻され言われるがままに渾身の力を振り絞つて握った。

シュッ

先端から鞭のようにくねくねとしたものが飛び出てきた。

「それでヤツを倒すのよ」

(む、鞭でか・・・)

僕は軽く鞭を上下に振ってみた。

瞬間的に振り上げられた鞭は勢いよく振り戻され、地面に叩きつけられた際に小気味良い音を発した。

そこでなぜか僕に「倒せるかも」と無謀な期待に似たものが湧いてきた。

「さあ、行くのよ」

異形はもうすでに立ち上がりゆっくりとこちらに歩み寄っている。

(・・・もうどうなっても知らないぞ)

僕は異形目がけて駆け出す。

肆【Eliminator】

と、僕は四、五歩進んだ所で立ち止まる。

「そういえば僕鞭使った事ないんだけど」

振り返ってオウムに尋ねる。

「まずは好きなようにやってみなさい。ほら、後ろ」

僕の周りに影が覆いかぶさった。

異形が僕に向かって丸太のように太い腕を振りかざしている。

そして重力にしたがってその腕が

異形の行動速度とは反して勢いよく振り下ろされる。

「うおっ」

僕は転がるように異形の懷のスペースに避けた。

「今よ！」

オウムの掛け声に咄嗟に反応して僕は鞭を振る。

パチン

当たった。

僕の後頭部に。

痛みに悶絶していると僕の姿を失った異形が

自分の懷でのた打ち回っている僕に気付き次なる攻撃を繰り出す。

オウムは離れた所でげらげら笑っている。

オウムめ。

異形は学習能力がないらしく同じような攻撃を続けた。

さすがの僕も見慣れてきたようで軽くかわす事ができた。

「避けてばかりじゃ死なないわよ」

「分かっているけど」

「とりあえず思うように鞭を振ってみなさい」

僕はそう言われ、力なく鞭を振って異形に攻撃を与えてみた。攻撃といえるのか分からないほどだが。

ピシィ

今度はうまくいったようで異形の左膝辺りに命中する。

ごおおお

異形が唸った。

どうやらこんな攻撃でも意外と効き目があるようだ。

「効いてる？」

「そりゃそのムシはSランクだからね」

Sランク。

意味が分からなかったが、今聞くと長くなりそうだったので聞かずに攻撃を続けた。

ピシィ パシィ

異形からの攻撃を避けつつも鞭を振るう。

すると異形の行動がピタリと止んだ。

「あれ？」

「よく見なさい。そのうちコアが現われるから」

「コア？」

「コア」

オウム返しをくらった。

オウムの言葉に僕は目を凝らし異形を見た。

がぼっ

異形は口らしき部位からどす黒い球状のものを吐き出した。

「あれがコアよ。さあ、あれを壊すの」

コアと呼ばれる物が出てから異形の動作はピタリと止まったままだ。僕にもこれが好機だと判断しコアの破壊を急いだ。

ピシィ

コアに鞭を振ると一撃でコアは音もなく消え去った。と同時に異形の姿も薄れ、やがて消えていった。

「ふう」

「よくやったわね。これであなたもメンバーの仲間入りよ」

「は？」

するとオウムの目が光った。

その瞬間オウムは黒いスーツを着た身長の高めな女性へと変わっていた。

「私はスノウよ。よろしく」

「ちよつと待って」

僕は差し出された手に答えずに言った。

「メンバーって何？そもそもあの気持ち悪い化け物は？あなたは何者？」

「そんな一氣に聞かないでくれる？」

僕は一呼吸置いてから改めて聞いた。

「じゃあ、まずあなたは何者なんですか？」

彼女は答えた。

「私はスノウ、除去師よ。」

「除去師？」

「ええ」

「何ですか、それは」

スノウは答えた。

「ここじゃ場所が悪いわ。どこか人気のなさそうなところへ行きま

しょ」

ふと我に振り返りを見渡すと道行く人々が僕の方を怪訝そうな表情で見ている。

そうだ。

一般の人間には見えないんだ。

それで僕が道端を転がったり駆け回ったり。

客観的に考えたらかなり恥ずかしく思えてきて僕は俯く。

「じゃ、じゃあもうちょっと行ったところに裏路地があるのでそこで」

「わかったわ」

僕等は人気のない裏路地へと足早に向かった。

伍【臆病者1】

太陽はもう沈んでいるがまだうつすらと辺りは明るい。

僕とスノウは閑散とした裏路地へたどり着いた。

「さて、除去師について…だったわね」

僕は首を縦に振る。

「除去師って言うのはね……」

普段の日常生活には霊とかその類のものはどこにでも存在する。

そういった霊だけなら特に目立った害はないので、除去師の出る幕はないのだが、

さつき現れた異形のように異質な変形を遂げた靈魂は生憎、命ある人間に多大な害を及ぼす。

靈感のある人間誰もがそっちの業界でいう「ムシ」が見えるわけではなく、

極めて靈感が強く秘めたる正義を持つ者にしか見えないらしい。

それらを言わば「除去」するため、各地から集められた精鋭達が組織し、部隊を形成。その一人一人が除去師である、と。

除去師は一人ではないがそう大人数でもない。

今現在、地方のみならず国外にいる除去師も合わせて九人しかいない。

大人数というかごく少人数で組織側も困っていたらしい。

そんな矢先に僕が現われた。

「・・・という事」

「という事って・・・」

僕も除去師についての仕組みは分かった。

「さあ、いろいろと手続きがあるから今から私についてきてくれる？」

「嫌です」

僕はあれこれ言わずに答えた。

「何だよ!？」

スノウは目を丸くして言った。

「どうして僕なんですか？」

「見える、からよ」

「他にもいるんじゃないですか？」

「あのね、何人もいるって訳じゃないの」

スノウは一つため息を吐いてからそう言った。

「あなたは今まで除去師になった人より異質なようね。

人一倍正義感をもっているくせにそれを表に出そうとしない。

それとも、臆病になってでもいるのかしら」

僕は何も言い返せないでいた。

「そんな隠そうとしないで、表に出したら？」

私たちはそれを笑ったり冷やかしたりしない」

僕は正直迷っていた。

正義のヒーローなんて・・・カッコ悪い。

でも本当の自分はいろんな困ってる人を助けたい。

今までもそうだった。

スクランブル交差点のど真ん中で老人が転倒し、買い物袋の中身を全て道端に落としてしまった場面に出くわした事がある。

しかし道行く人はビジネスマンが多いためそんなことに構っている暇はない。

もちろんみんな見て見ぬフリをして通り過ぎていった。

僕は助けようか迷っていた。

そんな矢先に一人の青年がその老人を手助けた。

それを皮切りに次々と周りの人が手を差し伸べる。

僕は思った。

何だ、僕がやらなくてもよかったな。

その前でも「誰かが助けるだろう」と思っていた。

陸【臆病者2】

「どうするの？やるの？やらないの？」

スノウは明らかに迷っている僕に追い討ちをかけた。

「まあいいわ。こつちもこつちでこんな臆病者に入ってもらっても、任務でヘマされそうで困るだろうしね。」

さっきのムシの時はご苦労様。もうあなたにムシを倒せなんて指令は出さないから安心して。それと」

そう言つて僕に詰め寄り僕が握り締めていた鞭棒を取り上げた。

「この鞭はあなた以外のふさわしい人に渡すとするわ」

そしてスノウは踵を返し先ほどのオウムの姿に変化した。

「それじゃ、私は本部にこの事を伝えなきゃいけないから。」

あとくれぐれもこのことは口外しないでちょうだい」

スノウは漆黒の両翼を羽ばたかせ宙に浮いた。

「ちょ、ちょっと待って」

僕は無意識に叫んでいた。

飛びかけていたスノウは僕に向き直り着地した。

「何？」

そう言つたスノウの表情はどこか笑みが含まれていたように思う。

「臆病者呼ばわりしないでくれますか？」

「何、実際そうでしょ？」

「僕のどこが臆病者なんですか？」

「力を持つてくるくせにかっこつけて隠したがるころ」

僕は決心した。

「じゃ、じゃあ除去師つてのになつてそのレッテル剥がしますよ」

どうにでもなれ、僕はそう思った。

スノウは人が変わったかのように態度が一変した。

「ほんとに！？じゃ決定ね。そう言うと思って本部にも予め入隊書の準備させておいたのよ」

してやられた。

僕はうんざりして右手で頭を軽く掻いた。

しかしどこかすっきりした感じが僕を包んでいた。

「さあ、早速本部へ同行してもらおうかしら」

スノウはポケットから携帯サイズの通信機を取り出した。

「あ、こちらスノウです。・・・ええ。例の任務は無事終了しました。」

・・・はい。街への被害も最小限に食い止め、死傷者もゼロです。これから本部の方へ彼を連れて行きますので。・・・はい。

宜しく願います」

電子音と共にスノウは通信を切断した。

「よし。これで報酬もアップね」

「報酬？」

「ううん、こつちの話」

「っていつかさっきの街への被害とかってまさか・・・」

スノウは数秒考えてから思い出したかのように言った。

「ああ、あれね。君の能力を確認したくて本部側がテスト用に製造した

ムシよ」

「謀ったってこと？」

「まあ君には悪いと思ったけど、期待通りの動きをしてくれたわ」
僕はため息をつく。

「あの・・・化け物と一緒にだった女性は・・・」

「あれもこちらで用意したサンプルよ。本物じゃないわ、安心して」
僕はもう一度深いため息をつく。

「そうだ、まだ君の名前を聞いてなかったわね」

「事前に僕の事を調べてあったんなら名前くらい分かるんじゃないんですか？」

スノウは言う。

「こちらで調べれるのは能力を持った人材の所在地と性別くらいなものよ。」

あとは私たちが現地に潜伏して捜査するだけ。君とはたまたま出会えただけで

こんなに早く見つかるケースは珍しいのよ」

僕はどこか腑に落ちない様子で

「村雨、銀二」

「銀二君ね。スノウよ。改めてよろしく」

僕は差し伸べられたスノウの手を二度目にして強く握った。

漆【Half Moon】

どれくらい除去してきたらうか。

「おい。菊之助！今日はもう休め」

俺を呼ぶ隊長の声。

「あー。まだ消し足りないんですけど」

「まだってお前・・・今日一日でもう五体目だぞ」

俺の上司、コールマン隊長は両肩を撫で下ろした。

「いや隊長、俺もそろそろかなって思ってるんですけど

こいつがね」

俺は右手に持っている妖刀『断月』^{だんげつ}を恨めしそうに見た。

柄の部分にある半月の模様が不気味に緑色に光る。

しかし俺はムシを除去するのは嫌いではない。

「ったく。とりあえず今日はお終いだ。もうムシもこの時間じゃ出てこないだろ」

コールマン隊長は胸ポケットから電子端末を取り出し電子ペンで画面上をなぞっている。今日の俺の成果を記録しているようだ。

「菊之助、お前今日の任務の内容はMランク、Sランクのムシ一体ずつだが、

余計に三体除去している。何かあったのか？」

隊長は腕組みをして俺に聞いてくる。

「あー。別に何もありませんよ。ただもつと報酬が欲しいだけですよ」

「報酬ってなあお前、そんなに変わんないぞ？」

「普通のノルマより余計にもらえるだけマシですよ」

「そんなに執着しなくても・・・」

「シッ」

俺は何かの気配を感じ隊長の言葉を遮った。

「どうした？」

隊長は小声で俺に問う。

「何かムシのような気配がチラツと」

「しかしリーダーは反応してないぞ？」

そう言つて俺は小型のムシ専用探知機の画面を見る。

『午後八時二十六分』という時刻以外は何も表示されていない。

「いや、しかし確かに気配が・・・」

俺は背後に違和感を感じた。

「後ろっ！」

隊長と俺は咄嗟に背後の「違和感」との間合いを取った。

そこにはスーツを着たホストマン的な男がゆらりと立っていた。

しかし目は焦点があつてないようで足取りもおぼつかない様子だ。

「よ、酔っ払いか？」

「いえ、よく見てください。後ろ」

俺は男の背後を指差した。

「む、あれはムシか。男の方はもう事切れているようだが・・・

どうやって気配を消して俺らの背後をついたんだ？」

ムシは体中から出ている細い管を男に刺し生氣と血液を吸い取っている。

俺らの世界ではメルと読んでいる電子端末を取り出しムシの情報を得る。

「隊長、しかもあれSランクですよ」

「ならなおさら妙だな」

そついいながらも俺は断月を、隊長は帯電レールガンを取り出した。

「隊長、俺一人で充分ですよ」

「しかしお前、今日はもう五体も除去しているし、それに断月への・・・」

「隊長」

俺は少しトーンを強めた。

「六体目、除去して参ります」

「あ、ああ・・・」

そう言って俺はムシへと駆け出す。

また報酬が増える。

まだ足りないが着実に金は貯まってきている。

もう少しだ。

もう少しであの人は甦る。

断月。

お前がいれば怖いものなどない。

俺は一太刀でムシのコアを破壊した。

ムシは徐々に崩れ落ちゆつくりと蒸発していく。
ゆつくりと。

半分だけ光り輝く月へと蒸気は立ち上っていく。

捌【転送】

時刻は午後の八時三十分。

「今から本部に行くけど……いいわよね？」

「よくない」

僕は首を横に振った。

「何よ、何か準備でもしてくるの？」

「うん。母さんに言わなきゃ」

「除去師の事はちゃんと伏せるのよ」

「大丈夫だよ。適当に口実作って出てくる」

そう言っ僕はスノウと近くの公園で待ち合わせをして自宅へ戻った。

午後八時五十五分。

僕はジャージに着替えスノウの待つ公園へと到着した。

「スノウ」

僕は外灯の薄明かりの空虚へ言い放った。

「ここよ」

スノウは外灯付近のジャングルジムの頂上に座っていた。もしかして遊んでいたのだろうか。

「銀二君、私のが年上なんだから“さん”を付けなさい。あと敬語も」

「すみませんスノウさん」

「あ、あまり謝る気ないわね」

スノウさんはため息をついて僕の傍に飛び降りた。

「さあ、心の準備はできた？」

「できましたけど……どこに本部はあるんですか？」

「ま、とりあえず私について来なさい」

そう言っスノウさんは歩き始めた。

ジャングルジムから離れた所にある滑り台に向かっている。

（あそこから行くのか？）

僕は半信半疑でスノウさんの後をついていった。

スノウさんは滑り台につくまで何も喋らなかった。

「さ、足元に気を付けて」

「気を付けてって・・・滑り台になんか登って滑るつもりですか？」

スノウさんは振り返って笑った。

「ええ」

「ええって・・・」

「まずは銀二君が滑った方がいいわね」

そう言って僕は背中を押され転がるように滑っていった。

「いたっ！あでっ！うがっ・・・」

体中を斜面にぶつけながら転がっていく。

そろそろね。

スノウさんがそう言ったように聞こえた。

途端、斜面部分の半分付近に近づいた時にオレンジ色の光りが僕を包んだ。

「な・・・なんだこれは！？」

「さ、私も行くかな」

スノウさんが勢いよく滑ってくる。

そして僕の脇腹にドロップキックがお見舞いされる。

速度がついている分とてつもなく重い。

「死ぬ・・・」

すると眩いばかりの光りが僕の視力を奪った。

僕は咄嗟に目を瞑った。

「うわっ！」

瞼越しに光りが治まるのを感じる。

ゆっくりと目を開けると暗闇が広がっていた。

「ここよ」

スノウさんの気配が真横に感じた。

すると天井からの一つのスポットライトがある地点を照らす。

何かある。

誰かいる。

「ようこそ」

そう言った低い声の主は男性のようだ。

「リーダー、ただいま帰りました」

スノウさんはそう言って頭を下げた。

「その子が、例の子か」

「はい」

スポットライトに照らされていた男が振り向き僕の方へ歩み寄ってくる。

玖【黒服】

僕の正面三十メートルほどにいた男がゆっくりと歩み寄る。
だんだんとその姿は大きく……。

大きく……？

「ちっ、小さ……」

「銀二君！」

スノウさんは慌てたように僕の言葉を遮った。

目の前には身長百五十センチほどの小さなおっさんがいる。

この人が本部の一番偉い人なのか。

オールバックの髪型に口ひげは確かに威厳はある。

顔つきもとても凜々しいし見ればリーダー格だと言うのはわかる。

ただ顔だけを見た場合のみだ。

「何か私の顔についているかな？」

「いえ……」

口を押さえてないと今にも吹き出しそうだった。

スノウさんが僕に耳打ちをした。

「ちよつと銀二君。リーダーの身長のこととは触れないでくれる？」

僕も小声で言い返した。

「何ですか？」

「それは銀二君本人が察してる通りよ！」

「何をしておるのかね。早急に手続きの方を済ませてほしいのだが」

リーダーと呼ばれている男はわざとらしく咳払いをして言った。

「あ、はい」

そう言つてスノウさんは僕の腕を半ば強めに引つ張った。

僕はそのまま強引に引つ張られリーダーから大分離れた所に連れてこられた。

「この装置の上に順番に両目、利き手を置いて最後に声を吹き込んでちょうだい」

スノウさんは大きな装置を指差して言った。

僕は言われたとおり両目、利き手の左手、そして声を吹き込んだ。

『ビーー 認証および登録完了』

電子音と共に機械的な音声を発したあと静寂が訪れる。

「もう終わりですか？」

「そうよ」

僕はもつといろいろな体の隅々まで調べられたりすると思っていたので

少し面食らっていた。

するとスノウさんが簡単に説明じみたことを話し始めた。

「これで銀二君も正式に除去師の仲間入りよ。まあまだ端くれだけどね」

「で、これからどうすればいいんですか？」

スノウさんは一つ頷いた。

「とりあえず銀二君は私の隊に所属してもらう事になるわね。

それと使用する武器は・・・今日使ったこれでいいわね」

スノウさんは今日僕がムシを除去した時に使った鞭棒をくれた。

「それは妖鞭『蛇王』^{だおう}よ。慣れるまで時間がかかると思うわ。

なんせ蛇王は私たちが使うウェポンの中で一番扱いが難しいからね」

「なんでそんなものを僕に与えるんですか？」

「銀二君が選んだんでしょ」

スノウさんは鼻で息を吐いた。

「それから私の事はスノウ隊長と呼んでくれるかしら」

僕は首を縦に振った。

スノウ隊長は僕のジャージ姿を見かねて着替えを用意してくれた。隊長と同じ黒いスーツが僕の目の前に出された。

「本部ではこれで行動しなければならぬ。本当は任務の時も

このスーツを着ないといけないんだけど止むを得ない場合はしょうがないわ。

とりあえずその更衣室で着替えてきて」

僕は小さな部屋に案内されそこでジャージからスーツに着替えた。

「なかなか似合ってるじゃない」

初めて着たスーツに少しはにかんだ。

「さあ、タイミングがいい事に今から会議があるらしいわ。ついてきて」

隊長にそう言われ、慣れないスーツに革靴を履いてぎこちなく隊長の後に行く。

拾【煙草】

コールマン隊長は今日の記録を修正している。

「ったく。まだ除去師になって一週間の若造が・・・」

「実力主義の世界ってのは居心地がいいですね」

隊長は俺に一瞬目をやり、片手で豪快に頭を搔いてからメルに視線を戻す。

ちなみにコールマン隊長は黒人でスキンヘッドの大男だ。

「山脇菊之助、本日六体除去完了、っと」

報告が終わった隊長はメルをポケットにしまった。

「でもおかしいよな」

隊長は険しい顔をしている。

「そうですね。Sランクのムシが気配を消すなんて。ましてや俺たち除去師の

背後を取るなんて今まで無かったですからね」

「ああ」

「どうやって身に付けたんでしょうか？」

「確かにSランクのムシたちはLランクやMランクの奴らと違って学習能力が極端に低いからな」

隊長は違うポケットから煙草を取り出した。

「あ、俺にも一本ください」

「お前まだ高校生だろ」

「周りみんな吸ってますよ。除去師に未成年の喫煙は禁止、だなんて規則ありましたっけ？」

隊長は閉口してしまった。

俺は隊長の許可も得ず煙草を一本頂いた。隊長も拒みはしなかった。隊長のライターで火をつけ俺はニコチンを肺に吸い込み吐き出す。

「仕事の後の一服って最高ですね」

「しゃらくせえよ。まだ十八のガキが」

「一応仕事の腕は一人前のつもりですけど」
「まあ・・・一週間にしちゃ出来だな」
俺は隊長としばしの休息をとった。

ビー
ビー

他愛もない会話をメルが発する電子音が俺たちを遮断する。

「どうしました？」

「おお・・・。緊急会議があるそうだ」

「えー。まさか本部に行かなくちゃいけないんですか？」

「もちろんだ」

俺は肩を落とす。

正直俺はリーダーとか言うあのちっさいおっさんはあまり好きじゃない。

入隊する時に高校生らしからぬ態度だとか髪の毛の色だとか保護者的な立場で

モノを言われて以来敬遠している。

俺は意外と思った事を言うタイプなので

『どうでもいいけどあんた身長いくつ？』

と聞いてやったら途端にコールマン隊長の鉄拳が飛んできた。

まあリーダーのおっさんは怒りに震えてたのが見え見えだったけど。俺はそのあとコールマン隊長のもう一発鉄拳を食らって口止めをされた。

「あのおっさんどうもなあ・・・」

「おっさんじゃない。リーダーだ」

「俺あのちっさいリーダー嫌いなんですよ」

隊長の拳骨が一週間前と同じように俺の頭に振り下ろされた。

「いつてえ！」

「嫌いとか言うんじゃない」

「・・・」

隊長は不思議そうに俺を見る。

「ちっさいのは否定しないんですね」

「・・・」

俺はそれ以上のことは言わないようにした。

「さあ。会議に遅れるとキツイお仕事やらされるからな。早く行くぞ」

「隊長。転送装置はどっち使いますか？」

除去師にはいつでも本部へ行ける様に転送装置というものが各個人に渡される。

「俺のを使おう」

「あ、お願いします」

隊長はフラフープのような転送装置を出しその輪の中に入った。

「じゃ先に行くぞ」

隊長はそう言って消えた。

俺も後を追うべく輪の中に入り本部へと転送される。

間道【憎悪】

僕のママは優しくてお料理上手。

僕のパパは面白くて力持ち。

僕はママとパパが大好き。

今日だって今から遊園地に行くんだ。

ママの作ったお弁当とお茶の入った水筒を持って行くんだ。

パパは力持ちだからピクニックシートを持つ係。

遊園地に着いたぞ。

何から乗ろうかな。ねえパパ？

観覧車乗ろうよ。あ、コーヒークップもいいな。

ジェットコースターは怖いけどお化け屋敷よりはいいかな。

メリーゴーランドは女の子みたいだからいいや。

あ、風船欲しいな。あのパンダさんが持ってるやつ。

ママ、お弁当はどこで食べよっか。

あそこの大きな木の下がいいな。日陰で涼しいし。

あ、でも他の人たちにとられちゃったね。

そうだ。パパ肩車してよ。

ママ見ててよね。僕一気に怪獣くらいおっきくなるからさ。

あれ？

パパ？ママ？

何でそんなところでお昼寝してるの？

パパ、ママ、赤い・・・赤い血がいつぱい出てるよ？

他のお客さんも何をそんなに急いでるの？

え？何？難しい事言われても僕わかんないよ。

あ！パパを踏んづけないで！

僕のママを蹴らないで！

パパにてっぽう撃つのやめて！ママの体を傷つけないで！

やだよ。みんな倒れてくよ。

みんな赤い血がたくさん出てきて動かなくなってる。

白い服着たおじさんがいっぱい僕の方に向かってくる。

怖いよ。

こっちに来ないで。

僕、幼稚園じゃかけっこ一番なんだぞ。

痛い！

いきなり何するの？

僕の頭を踏まないで！痛いっ！

ああ・・・てっぽう向けないで。僕を殺すの？

やめてよ・・・。

やめて・・・。

ヤメロオオオオオ！！

拾巻【集結】

しばらく本部の薄暗い廊下を歩く。

すると目の前に周りの扉とは違い、一際大きな扉が現われた。

そこには『Conference Room』という札があった。

「さあ銀二君。この中ではできるだけ私語は謹んでちょうだい」

そう言われ僕は暗闇で一際映える赤いネクタイを締めなおした。

「そんなに緊張しなくてもいいわよ。リーダーと私たち隊長クラスの人が集まるだけだから」

と、スノウ隊長は一呼吸置いてこうも言った。

「ただ、この会議室が使われるのはちょっと珍しいからね」

僕は唾を飲み込み部屋に入る。

中はやはり薄暗い。

中央にU字型の大きな机が設置してある。

リーダーはプロジェクターを移す壁のすぐ近くに、

僕とスノウ隊長は入口の近くのプロジェクターから一番遠い席に座った。

よく見ると机も椅子も大理石でできている。

「他のメンバーが揃うまで待機していてくれ」

リーダーがそう言った矢先に僕の後ろの扉が開いた。

「おお、コールマン君早かったね」

僕の後ろからスキンヘッドの大男が現われた。

その横には見たことある青年もいた。

「あ」

「お、村雨じゃねえか」

僕の事を指差してそう言った赤髪の青年は、同じ高校で同じクラスの山脇菊之助だった。

「まさかお前も除去師に？」

「僕は今日なつたばかりだけどね」

山脇は僕に握手を求めてきたので僕も快く彼の手を握った。

「俺はまだ一週間だが、そこそこ成果は上げてるぜ」

「菊之助、知り合いなのか？」

山脇の隣の大男がそう聞いた。

「ああ、こいつは同じ学校で同じクラスの村雨銀二ってやつです」

「よろしく。コールマンだ」

「あ、どうも。村雨銀二です」

大男は手を差し出した。

大きな手だ。

僕の手は包み込まれるようにしてコールマンさんと握手をした。

そしてその手をそのままスノウ隊長に向けた。

「スノウ。久しぶりだな」

「コールマン隊長、久しぶりですね」

スノウ隊長は握手をしながらコールマンさんに頭を下げた。

「お前ももう隊長クラスなんだな」

「いえ、隊長のおかげですよ」

どうやらスノウ隊長が除去師になりたての時に所属した隊の隊長が

コールマンさんらしい。

なんでもスノウ隊長は組織で初の女性除去師らしい。

今までも女性で何人か除去師の卵をスカウトしてきたらしいが、そ

の女性達はキツイ訓練や

死の淵に立たされる場合のある実戦で根を上げることと断念して

きたそうだ。

しかしその中で唯一最後まで残ったのがスノウ隊長らしい。

そして僕たちが座っているすぐ横に二人は座った。

静かな室内。

僕はなぜか小声でスノウ隊長に尋ねた。

「隊長、除去師って何人いるんでしたっけ？」

「今日銀二君が加わったから・・・十人ね」

「じゃあと六人ですか」

「いや」

コールマンさんがコーヒーを一口啜って言った。

「国内組は我々四人の他にあと三人。そして残りの三人は国外組だ。したがってこの会議には出られないがメルを使って内容は知らせるのだ」

「じゃあ、あと三人来るまで会議は始まらないんですね」

僕も目の前に出されたコーヒーを啜った。

ブラックコーヒーだったらしく僕は少し顔を歪めながら飲んだ。

ガチャ

数分沈黙があつた後、扉のノブをひねる音で僕等四人は振り向いた。三人の男が室内に入ってきた。

「これで、国内組は全員揃ったようだな」

コールマンさんがそう言った。

そして今まで深刻な面持ちで手元の資料に見入っていたリーダーが口を開く。

「さあ、藤波君、黒松君、そしてリシオス君。適当に座ってくれたまえ」

誰がどの人かわからないが僕はその人たちが放つオーラのようなものに少し畏縮した。

「では、今から緊急会議を始める」

僕は背筋を目一杯伸ばした。

拾貳【特命】

「おい、オリチエ君。プロジェクターを開始してくれ」
リーダーは秘書らしき人を呼んだ。

するとプロジェクターの横の小さな扉が開いた。

「はいはあゝい。ちょっと待っててね」

何だか甘い口調で癖のある喋り方の人物がくねくねしながら出てきた。

「ああ・・・できれば会いたくなかったんだが」

コールマンさんは頭を抱えて肩を落とした。

「あの・・・あれは趣味ですか？」

僕はコールマンさんに聞いてみた。

「そうなんじゃないか。オリチエは私が入った頃からああだからな」
そういわれて再びオリチエという秘書に目を移す。

プロジェクターを操作している間もなんだかくねくねしている。

どうみてもオカマだ。

僕は初めて見るオカマになぜか落ち込んだ。

髪型は七三分け、ごつごつの男らしい顔に太い眉、剃ってもそれとわかる青髭。

極めつけはラグビー選手のような体躯だ。

「さあ皆さあゝん。あたしじゃなくて画面に注目してください」

僕は若干こみ上げる何かを押さえつけ画面に目をやる。

内容はムシ情勢についてかなり深刻な内容だった。
ムシには三つのランクがつけられている。

それは最下級ランクから順にS、M、LランクというものでSランクのムシは怪力の持ち主で体力もあり数も多い。しかし知能はゼロだ。

Mランクのムシは体力、力、知能他のランクと比べるとどれも平均的で数も一番多い。

除去師になりたては手こずるほどの相手だそうだ。

そしてLランク。

SとMランクのムシの能力を全て凌駕する厄介なムシだそうだ。

なかでも知能は人類をも凌ぐほどらしい。

そのLランクのムシ同士が徒党を組みSランクとMランクのムシを手なづけ

全世界を侵略しようと目論んでいるという情報を組織は手に入れた。僕達はその計画を阻止すべく除去師の全精力をかけ、そういったムシ達を撲滅させるという使命を受けた。

「隊長、気配を消して俺らの背後についたムシいましたよね。

あれってもしかしてこれと何か関係あるんじゃないんですか？」

「うむ。何かしら関係があると推測するのは否めないな」

山脇とコールマンさんがそう話していたのが聞こえた。

「そんなことあったんですか？」

僕はコールマンさんに尋ねた。

「うむ。我々が任務を終え一休みしている時にな」

「まあ俺が瞬時にぶつた斬ってやったけどな」

山脇は自慢げにそう言った。

「僕はまだ実戦経験はないから・・・」

「もしかして最初のサンプルだけ？」

「そりゃそうよ。まだ今日入ったばかりだから」

スノウ隊長は僕をフォローしてくれた。

「それにしても、最初の任務がこんな大それたものになってしまうとは。」

銀二君も大変だね」

コールマンさんがそう言って僕の背中を軽く叩いた。
僕は苦笑いをして頭を掻いた。

すると先ほどの三人のうち二人が僕の方へ近づいてくる。

「やあ、スノウ。久しぶり」

そう言ったのは金髪で長髪、そして長身で顔立ちのいい男だった。

「久しぶりね黒松君」

「相変わらず綺麗だね。どう？これから食事でも」

「あなたこそ相変わらずね。生憎これからこの子とデートがあるの」
スノウ隊長はあろう事か僕の腕を自分に引き寄せた。

僕は何故だか心臓の鼓動が早くなってしまった。

「何？そんな子供じゃなくて僕と・・・」

「藤波ちゃんも相変わらず元気そうね」

スノウ隊長は黒松という人の話を聞きもせずに違う男性の元へ歩み寄った。

「おう、スノウか。久しぶりだな。俺たちはいつも元気だぜ」

元気に滑舌よく話したのは藤波という男だが、どこか子供のようだ。
身長は低いがリーダーほどではない。百六十センチほどだろう。

緑色のキャップを被っている。時折見せる笑顔からは可愛らしい八重歯もちらつく。

「スノウ、こいつ誰だ？」

藤波さんは僕を指差してそう言った。

「ほら、銀二君。藤波ちゃんに自己紹介して」

僕は言われるがままに藤波さんの顔を見た。
目が青い。

その目を見ていると僕は吸い込まれそうになった。

「村雨、銀二です」

「銀二か。変わった名前だな。俺たちは藤波ってんだ。よろしくな」

「あ、よろしく願います」

すると藤波さんは腕組みをして何やら考えているようだった。

そして数秒考えた後に

「じゃお前はこれからギンギンだ」

「え」

妙なあだ名を付けられてしまった。

藤波さんは八重歯をむき出しにして満面の笑みを浮かべていた。

僕も一応愛想笑いをしておいた。

「銀二君か。よろしく」

僕の後ろからそう言ったのは先ほどの黒松さんだった。

「どうも」

差し伸べられた手に僕も応えた。

（痛っ・・・）

僕の手を握る黒松さんの手には相当の力が込められていた。

黒松さんはそれを一瞬も表には出してない。

惹き込まれそうな笑顔だった。

まさか僕なんかを敵視してるんじゃないだろうか。

先行き不安になった。

もう一人の男はおそらく流れからいつてリシオスと言う人だろう。

さつきからずっと椅子に座ったままだ。

「スノウ隊長。あの人は・・・」

「ああ、リシオスね。彼はこうやって馴れ馴れしくされるのが嫌な人なの」

「そうなんですか」

僕は不思議なオーラを放つリシオスさんに見入ってしまった。

なんだか危ない人のような気がする。

とりあえずあまり関わらないでおこう。

すると突然立ち上がりこちらに向かって歩いてくる。

（あ、自己紹介だけしておかないとな）

僕はリシオスさんが近づいてきたのを見計らって挨拶をした。

「村雨銀二です。よろしくおね・・・」

しかしリシオスさんは僕にわき目も振らず素通りし扉を開け退室していった。

「そう気を落とすなってギンギン。あいつは昔からあだからさ」
見かねた藤波さんが僕の肩を軽く叩いた。

今日は何だかよく励まされているのは気のせいだろうか。

「あらあ？何だか見かけない顔があるわねえ」
いかん。

一番関わりたくない人に目を付けられた。

例のくねくねしたオカマがこっちに来る。

プロジェクターを片付け終わったオリチエさんは明らかに僕に視線を向けている。

どうしようかと訳もなく辺りを見回しているとたくましい腕が僕の肩に回された。

捕まった。

「あらあゝ何この子はあ。スノウちゃんこの子？」

「き、今日除去師になったばかりの子です」

「んゝ、可愛いわねえ。お名前は何て言うの？」

僕は正直言おうか言うまいか迷った。

「村雨、ぎ、銀二です」

「銀二ちゃんね。あたしはオリチエ。ここで秘書やってるわん。よろしくねえ」

握手をするのかと思ったら暑苦しい抱擁だった。

何だか表現できないようなにおいがした。

「ちょ、ちよつとオリチエさん・・・長いです」

あまりの抱擁の長さに僕は気を失いそうになった。

そして数分の抱擁の後、やっとの思いで僕は解き放たれた。

「そうだわあ。もう一人仲間が増えたから皆に紹介しなくちゃねえ」
「」

オリチエさんはそう言って自分が出てきた扉を開けた。

「ほらあ、丁度皆揃ってるからついでに紹介しておきなさあゝい」

室内に向かってオリチエさんがそついうと中から見慣れた人物が出てきた。

拾参【三日後】

「あれ？」

扉の向こうから姿を現したのは僕もよく知っている顔だった。

「こ、虎徹！」

僕の幼馴染の虎徹が黒いスーツを着て出てきた。

「なんでお銀がこんなところにいるの！？」

「そりゃこっちが聞きたいよ。虎徹は何でここに・・・」

そこでオリチェさんが説明してくれた。

「あらあゝ虎徹ちゃんと銀二ちゃんお知り合いなの？ならよかったわあゝ。」

虎徹ちゃんとはあたしが医療部隊としてスカウトしてきたのよん」

オリチェさんの不気味なウインクは見てないことにした。

「医療部隊？」

「ええ。傷ついた除去師ちゃん達を癒す、まあ治療班みたいなものよん」

次は投げキッスをしてきたので素早く避けた。

「そうなんだ。じゃ虎徹も今回の任務が初なのか？」

「そうだね。お銀もそうなの？」

「しかもちゃんとした実戦は初めてなんだ。かなり緊張してるよ」

僕は虎徹と経緯などを話しながらオリチェさんに案内された部屋へと向かった。

僕と虎徹は各部屋に入り任務の遂行を約束して別れた。

中は高級ホテルのような造りになっていて一人じゃ使いきれない感じだ。

僕は明らかに庶民じゃ手に入らないだろう気高いベットのの上に寝そ

べる。

そして会議が終わった後スノウ隊長にもらったメルを取り出し時刻を見る。

日付が変わって深夜零時三十分を示していた。

大きなシャンデリアの明かりが深夜であることを忘れさせる。

すると画面には指令報告通知があることを示すアイコンが点滅していた。

（何だ・・・？）

僕はアイコンを選択してボタンを押す。

『皆に告ぐ。 任務実行日は三日後の明朝だ。 各自準備を整えておくように。』

他の任務が残っている場合は遠慮なく片付けてくれたまえ。 なお外出も構わない。

敵はこれまでになく手強い。 心しておくように。 b y 皆が敬愛するリーダーより』

三日後か。

最後の文はつつこまないでおこう。

（これから僕はどうなってしまうんだろう・・・）

目を瞑っているいろいろと思考をめぐらせた。

（下手したら死んじゃうかもしれないんだよな・・・）

そんな事を考えたら不安になってきた。

（いざとなったら逃げるしかないな）

僕は起き上がり部屋に完備してある風呂に入り眠りについた。

これから先、どんな試練が待ち受けているのだろうか。

つい昨日までは普通の高校生だったのに。

いや、変なものが見えるから若干普通じゃなかったのかも。

それに気がつくとか除去師とかいう訳の分からないものになって、それで三日後には全世界の命運をかける任務を実行する事になって

いる。

僕はちゃんと高校卒業できるのかな。

そんなことを思い浮かべ僕は夢の中へ。

拾肆【呼鈴】

『おはよう諸君！本日を目覚めはいかがかな？』

リーダーの声が僕の部屋に響き渡る。

室内に設置された業務連絡用のスピーカーを通してのモーニングコール。

しかもこの上なく大音量。

目覚めはいいものではなかった。

僕は寝癖で跳ね上がった髪の毛を掻きむしり、メルに目をやる。

時刻は午前七時丁度。

今日は平日だし学校も普通にある。

僕は制服を持ってきてないことに気がついた。

（どうしよう・・・）

寝ぼけながらも困っていると部屋のチャイムが鳴った。

バキーン

何だこのチャイム音は。

出入り口のドアの向こうから聞きなれた声がする。

「おい。お銀ー。起きてつかー？」

僕は寝起きのガラガラな声で答える。

「起きてまーす」

「今日の学校のことなんだけどさー」

そこで僕は早朝だということを思い出した。

虎徹のよく通る大きな声を廊下で出されては他のみんなに迷惑ではないか。

僕は急いでドアに駆け寄り虎徹を室内に入れる。

「おはよ」

「はよー」

そういう虎徹は制服姿だった。

「虎徹、制服持ってきたの？」

「うっん、オリチエさんが同じやつを取り寄せてくれたんだよ」

「じゃ僕もあるの？」

「もちろん」

そう言つて虎徹は制服の入った紙袋を僕に渡した。

「ありがと」

「オリチエさんが学校まで送つてってくれるらしいから早く用意しなよ。」

八時前には出発するからさ」

僕は一度頷いた。

虎徹も笑顔を見せ退室していった。

バキューン

歯を磨いているとまたチャイム音が鳴った。

バキューン バキューン バキューン

「はいはい」

歯ブラシをくわえながら慌てて僕はドアを開ける。

「何だこの部屋のチャイムは。おもしれーな」

藤波さんが無駄にチャイムを押しまくっている。

「藤波さん、もうやめてください」

「お？もついいのか？」

「いや、意味が分かりません」

「お邪魔しまーす」

そう言って藤波さんは強引に僕の部屋に入った。

勝手にソファーに座り勝手に冷蔵庫の中のコーラを出し、それを飲みながら勝手にテレビをつけ勝手に見ている。

なんて身勝手な人なんだ。

自由奔放という言葉が一番似合う人物だ。

「ギンギンさー」

「はい」

「今日暇？」

僕は歯磨きを追え、寝癖を直しながら受け答える。

「今日は学校なんですけど」

「別に学校終わってからでもいいんだけど」

「じゃ暇です」

「よし」

藤波さんはコーラを飲み干すと豪快にゲップをして僕の方を見た。

「夜さ、俺っちの相手をしてくれよ」

「はい？」

そこで僕はいろいろな考えが頭をよぎった。

相手？まさか藤波さんもオリチエさんみたいにそっちの気が……。

そんなはずはないだろう。

こんな、こんなと言っては失礼だろうが子供じみた人がそんな……。

いや、僕はそうじゃないけどそういう人から見れば藤波さんは母性本能というものをくすぐるような容姿だし性格だ。なくはない。

でもな……。僕はそんな趣味ないぞ。

「おい。ギンギン？」

僕ははつとした。

そしていかにも冷静を装って

「相手って何のですか？」

「そんなのシミュレートに決まってるだろ」

僕は変な安堵感に包まれた。

「シミュレートって何ですか？」

「そうか。お前まだ入りたてだったな。シミュレートは実戦形式の訓練みたいなものだよ。」

俺っちとギンギンがちよっくら戦っただけだ」

「なーんだ。僕と藤波さんが戦っただけ・・・」

待て待て待て。

急に何なんだこの展開は。

僕と藤波さんが戦う？冗談じゃない。

僕はまだ除去師になりたてだし、戦闘もサンプルでしかしたことない。

それに蛇王って鞭もろくに扱えない。

藤波さんは小柄で童顔で可愛いけど・・・スノウ隊長は言っていた。

『藤波ちゃんはこう見えても力持ちなのよ。握力なんて二百キロだし』

おいおいおい。

常人離れしすぎじゃないか。

握力二百キロって。林檎握りつぶせるなんてレベルじゃない。林檎を小指でデコピンしても粉碎できそうな勢いじゃないか。

そんな怪力の持ち主とシミュレート？死ぬって。

「無理ですね」

僕はこの上なく真剣に答えた。

「何でだよー。せっかくギンギンの力も見てみたかったのに」
藤波さんはふくれっつらをしている。

「残念だなー」

「・・・」

メキヤ

「残念だなー」

「・・・」

グシヤ

「残念だなー」

「・・・。やります」

「ほんと？」

原型をとどめていないコーラの缶を見たらそう言わざるを得ないだろう。

（ああ・・・三日後まで僕は行きてられるかな）

「じゃまた今日の夜にな」

「はい・・・」

藤波さんは嬉しそうに部屋から出て行った。

それとは真逆に僕は肩を激しく落とす。

意気消沈しながらも制服に着替えオリチェさんの用意してくれた車で虎徹と学校へ向かう。

「おはよん。銀二ちゃん。元気ないわね」

「え？ああ・・・おはようございます」

「何か悩みがあるんならあたしに相談してちょうだい。何でも手助けするから」

背筋に悪寒が走る。

「・・・やめてください」

「な・・・ちよっと銀二ちゃん、キツくなぁい？」

僕は何回も車内でため息をつきながら学校へと向かった。

拾伍【対峙】

夕暮れ時。

グラウンドには運動部の人たちが部活を始めている。

僕は帰宅部なのでそれを尻目に校門へと向かう。

もうオリチェさんの車が駐車してあるのが見える。

できれば本部へは戻りたくない。

なぜならば、藤波さんとシミュレートしなければならぬからだ。

僕は自分でもわかるほど遅いペースで車へと向かう。

虎徹は運動部、それもサッカー部なので部活をしてから戻るとのことだ。

グラウンドに視線を向け虎徹がいるか探してみる。

すぐに見つかった。

虎徹は元気よくサッカーボールを追いつけ回している。

遠くから僕を見つけた虎徹は元気よく右手を振った。

虎徹が部活中ということもあり僕は遠慮がちに手を振り返す。

俯きながらゆっくりと校門へ向かう。

「おかえりなさい、銀二ちゃん。まだ元気ないのねえ」

オリチェさんの不気味な喋り方で自分が車の目の前に来ていたことを自覚した。

「ああ、どうも」

僕はため息混じりにそう言った。

途端オリチェさんが僕を強く抱きしめた。

こ、殺される。

「強がらなくていいのよん。あたしの胸でいくらでも泣いていいから」

どうしよう。

他の生徒たちがこの異様な光景を蔑むような目で見ています。

早く、早く解放してくれ。

その願いも空しく、僕は車の後部座席に押し込まれた。

その帰り道。

「オリチエさん」

「なあゝに？」

「人前でああゆうのは控えてくださいね」

「何でよお？」

何でよつて。

この人のオカマ道はハンパなものじゃないな。

「いや、皆にいろいろと勘違いされても困りますし」

「そういえば銀二ちゃん。どうして今日はそんなに元気がないのん？」

無視か。

「え、ああ。実は今日藤波さんとシミュレートしなきゃいけないんです」

運転席のオリチエさんは勢いよく振り向いた。

「銀二ちゃん、藤波ちゃんとシミュレートするのぉ!？」

「ちょ、オリチエさん!前!」

「大丈夫よ。この車全自動だし危険感知システムもついてるし。」

そこらのペーパードライバーよりも運転上手いって言い切れるわあ」

「じゃ、じゃあ何でオリチエさんは運転席に座ってハンドル握ってるんですか？」

「そんな他の人から見て怪しまれないために決まってんじゃないのよん」

いや、今の状態もかなり怪しまれそうだが。

「で、銀二ちゃん。本当に藤波ちゃんとシミュレートするのぉ？」

「え、ええ。今朝藤波さんから直々に」

オリチエさんは「こうしちゃいられない」と言い慌ててメルを取り出す。

「あ、もしもし？オリチェだけど。今日の夜藤波ちゃんと銀二ちゃん
がシミュするらしいの。」

ええ。出来るだけ多くの医療部隊を用意しておいて」
何だか物騒な会話をしている。

そもそもできるだけ多くの医療部隊ってどういうことだ。

そんなに僕は痛めつけられるのだろうか。

下手したら仲間内に命をとられてしまうというのも考えられなくはない。

「それじゃ頼んだわよん」

そう言つてオリチェさんは会話をやめた。

「大丈夫よ銀二ちゃん。ちゃんと医療部隊の手配はしておいたから
あ」

「つてかそんなに大事なんですか？」

一瞬の空白。

「大丈夫よ。医療部隊は手配したからあ」

オリチェさんは目を合わせない。

僕、死ぬのか？

そうしているうちに本部の入口まで着いた。

館内に入る入口のところで藤波さんが立っているのが分かった。

そして車を車庫に入れオリチェさんはそそくさと本部へ入っていった。

僕も本部内へ。

「おかえり」

「あ、どうも」

藤波さんの出迎えに僕も会釈をした。

「さ、早く準備してくれよな。俺っちはもういつでもいけるから」
藤波さんの青い目が爛々と光って見えるのは気のせいだろうか。

僕は藤波さんに分からないようにため息をしてから「はい」と返事をし、部屋に戻った。

拾陸【各々】

日が沈んだ。

窓の外から沈んだばかりの太陽の光りが名残惜しむかのように差し込む。

俺は滴る汗をタオルで拭きながらトレーニング室から出た。

「お、菊之助か。こんなどこにいたのか」

すると目の前から煙草を銜えたコールマン隊長が歩いてきた。

「どうかしたんですか？」

俺は尋ねる。

「なんでも、今から藤波と村雨がシミュレートをするらしいぞ」

「村雨が・・・？そうなんですか」

淡々と汗をふき取りスポーツドリンクを口にする俺を見て隊長は拍子抜けしている様だった。

「お前、興味ないのか？」

「特にないですね。確かに藤波さんは強いですけど村雨には興味ありません。」

でも村雨の実力も知っておきたい気持ちもありますけど

力の差がありすぎてつまんなさそうです」

俺はたくさん汗を吸い取ったタンクトップを脱いで体を拭く。

そんなに冷たい言い方しなくても、と隊長は呟いた。

「隊長は見に行くんですか？」

「まあな。一応指揮官の位置にいるから新入りの力も把握しておく必要があるしな」

「じゃもしおもしろそうな展開になったら俺も呼んで下さい。見るだけ見ますから」

俺は飲み干したドリンクのボトルとタオル、

着替えたタンクトップを持ってトレーニング室の出入り口に向かった。

僕は黒いスーツに着替えて赤いネクタイを締める。
本当はもう締め終わっているのだが余計に締めなおす。

とりあえずできるだけ時間を稼いでいるつもりだ。

こんなところで時間を稼いでも無駄な事は分かっていたが、ひよつとしたら藤波さんの気が

変わってシミュレート中止つてなるかもしれない。

そんな淡い願望を抱いてみた。

「おい、ギンギーン。早くしろよー。俺っちウズウズしてんだよー」

そんな淡い願望は即座に打ち砕かれた。

「は、はい。今行きまーす」

僕は一度しか使った事がない蛇王を持って部屋を出た。

シミュレート室へ行くため廊下を歩く。

横で嬉しそうに笑みを浮かべあれこれ喋っている藤波さんと並んで。

「ギンギンはどんだけ強いのかなー」

「あ、僕ほんつとに弱いですから」

「そんなんやってみなきゃ分かんないっしょー」
「いやいや。」

僕は戦闘初心者なんだつてば。

「藤波さん。何で僕なんですか？」

「そりゃ俺っちの頭にピピツときたからさー」

藤波さんは自分の頭をつついて笑顔を見せる。

僕はこんな時にふと疑問が浮かんだ。

「藤波さんって・・・いくつなんですか？」

藤波さんは少し考えてから言った。

「んー。俺っち人間じゃないから何歳とかわかんないんだよね。」

一応設定は小学生ぐらいだけどギンギンやキックスより生きてるよ」

「キックスって誰ですか？」

「ん？ああ、山脇菊之助だっけ」

だからキックスか。

というか藤波さん人間じゃないってどういうことだ。

そんな人間以外で人間のような生き物なんて。

漫画やアニメだけの世界だと思っていた。

僕はあれこれ考えたが、もともとムシのような化け物がある時点で藤波さんみたいな人がいても不思議じゃないと思いなおした。

「で、藤波さん以外にもそういう人いるんですか？」

「んー。ここでは俺っちとコールマンと黒っちかな。あとリーダーも」

頭の中でいろんなことの整理がつかない間に目的地へと着いてしまった。

「ほら、ギンギン。ここがシミュレート室」

藤波さんはガラス張りで中が見える大きな部屋を指差した。

しかし中は真っ白な壁で覆われており何も無い。

藤波さんは言った。

気候や温度、地形や障害物といった自然のものを自分達の好きなように実現できる、と。

内装は防音でどんな大爆音も一切外に漏らさない。

壁などに特殊な素材を使い、傍観する際のガラスもどんな攻撃にも耐える強度を持っている。

「さ、始めよーぜ」

僕は藤波さんに引く張られシミュレート室へ入る。

僕、生きてこの部屋から出られるのかな・・・。

拾漆【懸隔】

藤波さんは僕にどんな場所でやりたいか聞いてきた。

そんな経験ないし僕は藤波さんに任せた。

藤波さんはすぐに『大草原』と答えた。

すると真っ白だった周りが一瞬のうちに一面緑の世界に変わった。

「す、すげえ……」

ここが先ほどまで真っ白な世界だとは思えないほどだった。
見事なまでに大草原が実現されており触れることも出来る。
草独特のにおいもする。

「さあ、始めようか」

そう言つて藤波さんの右手が光った。

激しい閃光の後、藤波さんの手に一際大きな斧が現われた。

「藤波さん……それは……?」

「ああ、これが俺っちの武器。名前は『砕神^{くだがみ}』っつーの」

見るからに重そうな斧を藤波さんは軽々しく振り回す。

僕も左手に持った蛇王を強く握り締める。

「……蛇王ね。ギンギンも接近戦型か。んじゃ行くよ」

途端藤波さんの姿が消えた。

すると小さな影が僕を覆った。

上だ。

ドガァ!

爆音と共に足元の草が飛び散る。

僕はギリギリのところまで避けたが飛び散った石の破片が僕の頬を切った。

「お、よく避けたな。次はもうちょい速くいくから覚悟しろよ」

そう言つて藤波さんはあっという間に僕との間合いを詰めた。

僕の左側からばかでかい斧が物凄い速さで向かってくる。

避けきれない！

僕は咄嗟に蛇王の柄の部分で受け止める。

凄まじい衝撃。

「お、ギンギンは武器同士が反発しあうってこと知ってたのか？」

僕は藤波さんに五十メートルほど吹き飛ばされた。

受け身も取れず派手に草の上を転がる。

転がる速度が落ちてきた頃に僕はようやく片膝をつき藤波さんに向き直る。

藤波さんの言葉から推測するところだ。

除去師が使う特殊な武器はムシを除去するために作られたもので実際には

味方である武器同士が対峙するケースはないわけだ。

だからそれぞれに反発しあうものがあるのだらう。

前にスノウ隊長が言ってた。

武器は生きているし使い主と同調すればするほど強くなる、と。

さっき藤波さんの斧の歯が僕の蛇王の柄に衝突する瞬間を見たのだが完全に衝突しきってはいなくて何か間に壁のようなものがあつた。

さらに推測することに武器同士の攻撃ならどんな衝撃にも耐えられる。

僕は静かに立ち上がる。

遠くから見る藤波さんはいつもより小さいがそのオーラは凄まじく大きい。

藤波さんが身構える。

僕の目の前数メートルの位置まで詰め寄った。

ブォン！

僕は後方に飛んで避けた。

藤波さんの斧の空振りの音がやけに大きく感じる。

自分でもわかった。

これまで以上になく神経が研ぎ澄まされている。

その証拠にだんだん藤波さんの動きに自分が付いていけている。

ドガアアアン！スガガガガ！

藤波さんからの容赦ない攻撃が繰り返される。

まだ避けるしかできそうになかったがそれでもまともに攻撃を受けてはいない。

「ギンギンも慣れてきたみたいだな。避けてばっかじゃなくて攻撃してこいよ」

藤波さんは僕に攻撃しながらも余裕を見せるかのように喋りかけてくる。

「でも・・・楽しいな」

笑顔で大きな斧を振りかざしてくる。

僕も必死に避けるがだんだんと息が切れてくる。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「避けてばっかつてのは自分のペースじゃないから余計に疲れるんだぜ」

僕は蛇王を握り締める。

漫画の戦闘シーンとかでよく使われる言葉を思い出した。

やらなきゃやられる。やられるまえにやらなきゃ。

僕は目を見開き蛇王をしならせる。

「じゃ・・・下手ながらいきますよ」

藤波さんは不敵でなおかつ嬉しそうな笑みをこぼした。

「おう。こいよギンギン！」

僕は藤波さんとは程遠いスピードで突っ込む。

拾捌【期待】

僕は藤波さん目がけて駆ける。

「そんな遅いスピードじゃ俺っちを捉えられないぜギンギン」

「藤波さんと一緒にしないでください。僕は普通の人間なんですから」

「そうか？キックスは俺っちとまではいかんけどなかなか速いぞ」

山脇は学校でも態度は悪いが成績優秀でスポーツ万能だ。

しかし山脇がスポーツ万能といっても藤波さんのスピードは異常だし、山脇が藤波さんに

及ばないにしても常人には考えられない速度で駆けている事になる。だんだん山脇がこっち側の人間じゃない気がしてきた。

「とにかく・・・行きますよ」

僕は一気にスピードを上げる。

藤波さんは不敵な笑みを浮かべ仁王立ちしている。その青く輝く眼球はまっすぐ僕を睨みつけていた。

藤波さんが射程圏内に入る。

僕は蛇王を振った。

ピシィ

自分に当たらずうまく振る事ができたが藤波さんを捉える事はできなかった。

藤波さんは碎神をかざし跳ね返した。

「なんだよギンギン、その甘っちょろい攻撃は」

「だからまだ慣れてないんですってば」

僕は繰り返し蛇王を振る。

当たりはするもののどうしても藤波さん本体を捉える事はできない。

その間にも藤波さんの速くて重い攻撃が僕に浴びせられる。

「ギンギン、膝が笑ってるぜ？」

「そりやもう、大爆笑ですよ」

もう正直立っているのがやっとの状態だ。

「俺っち本体に当てなきゃ意味ないぜ」

「当たってればちよつとは戦況が楽になったかもしれないね」

ふと藤波さんが考える。

「それは、ない」

藤波さんの青い眼がより一層輝きを増す。

ちよつとでも気を抜けば恐怖心から心が折れてしまっただろう。

藤波さんはこれまでとは一変して僕を追い込むかのように次々と容赦ない攻撃を繰り出す。

僕もだんだん紙一重で避けるのが難しくなってきた。

「ギンギン・・・もうお終いだな」

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

初め生い茂っていた草原の影はもうない。

肩で息をし、碎けた地面に倒れこんでいる僕をまたいで藤波さんが碎神を振り上げた。

これはいよいよ死ぬな。

僕は目を瞑った。

「やーめた」

藤波さんは突然そう言った。

まるでつまらないゲームに飽きてしまった子供のように。

僕は目を開け上半身だけ起こした。

視界に入った藤波さんは碎神を担ぎ、僕に背を向け出口へ向かっている。

「あ、あのっ・・・」

そう叫ぶと藤波さんは歩みを止め振り向いた。

「どつたの？」

「いえ・・・」

飄々としている藤波さんの顔を見たら言葉が出なかった。

「俺っちも夢中になりすぎてたさ」

「あの」

僕は息絶え絶えながら言った。

「すみませんでした」

「何が？」

「いえ・・・その、相手にならなくて」

八重歯が見えた。

「気にすんなつて。俺っちも楽しかったからさ。ギンギンも結構素質あると思うぜ」

「そ、そうですか」

可愛らしい八重歯を見せる彼は大きく頷いた。

「じゃあ何で最後・・・」

「ああ・・・」

藤波さんは頭をかきむしって笑顔で答えてくれた。

「あそこでやめとかないと楽しすぎて殺しちゃいそだったから」

あくまで設定ながらも小学生が言う言葉か。

確かに戦闘中の藤波さんの眼は殺意がこもってた。

それはもつたんまりと。

僕は呆れと変な安心感でその場で大の字に倒れこんだ。

「殺す気だったんですかー」

「はは。ごめんごめん。とりあえずこてっちゃん呼んでくるさ」

藤波さんが出口でいろいろとスイッチを押している。

周りの景色も元の真っ白に戻り、出口のドアが開く。

「藤波さんっ！」

ん？、と藤波さんが振り返る。

「明日暇ですか？」

「何で？」

「・・・僕の相手をしてくれませんか？」

藤波さんは人差し指で鼻の下を擦る。

「へへ、俺っちは容赦しねーからな」

「百も承知です」

「この藤波誠一郎様がみつちり鍛えてやんべ」

「やるだけやってみますよ」

藤波さんは「ほんとかな？」と肩眉を上げ首を傾げてシミュレート室を出て行った。

この上なく嬉しそうな顔をして。

そう言った藤波さんの眼は空の様に澄んでいて優しい青色をしていた。

拾玖【過去】

どうやら藤波さんと村雨のシミュレートが終わったらしい。

俺がコールマン隊長に呼ばれて行ってみると一方的な展開がそこにはあった。

予想した通りの事に俺はすぐ部屋に戻った。

コールマン隊長の引き止める言葉も無視して。

数分した後本部の廊下で何やら満面の笑みを浮かべ、

やたらとテンションの高い藤波さんとすれ違ったのでシミュレートが終わったと感じ取った。

俺は部屋に戻ってシャワーを浴びる。

浴室の鏡に跳ね返った俺自身の肉体が目に入る。

俺は高校生離れしている。

いや、もう人間離れしているかもしれない。

もう少しだ。

きつと今回のこの大きな任務が成功に終われば報酬も弾むだろう。

そうしたら・・・。

そうしたら、母さんを助けられる。

そして親父をこの手で葬れる。

親父は俺が幼い頃から酒癖が悪かった。

仕事は一応毎日欠かさず行ってたけど何をしているかは知らなかった。

きつと決して陽の当たらない、当たってはいけない職業だったのだろつ。

それにクスリやシンナーとかアブナイ事も多くしていたし。家に帰ってくれば俺に暴力を振るった。

でも絶対に母さんには手を上げなかった。

それが何故かはわからないが。

そしてそんなある日。

親父は珍しく母さんを連れてどこか出かけていった。

俺にはデートだと言ってたな。

お味は半ば無理矢理母さんを引っ張って出て行った。

そして俺は留守番を任されて数時間が経った後。

電話があった。

母さんが事故って意識不明の重体だと。

俺は親父の事も聞いたが驚きの返事が返ってきた。

事故車の中には母さんしかいなかったらしい。

俺はすぐに親父が仕組んだ事だと分かった。

何だか心の中に黒い靄みたいなのがかかり始めた。

母さんは奇跡的に一命をとりとめたが心臓が動いているだけの、いわば植物人間になってしまった。

俺はほぼ蒸発状態になっていた親父に激しい憤りを感じながらも毎日母さんの見舞いに行った。

すると豪雨の降り注ぐ日。

落雷と共に親父が家に帰ってきた。

両脇に妖艶な女性を連れ、中に入るや否や俺を思っ存分殴った後母さんの通帳や金目の物を全て取って行った。

それ以来俺は親父の姿を見ていない。

もはやアレは親父ではない。

命に代えてもあのクズは俺が殺す。

俺は浴室から出て付着した水滴をタオルでふき取りバスローブに着替えた。

ベッドの上に放り出したメルは午後十時を示していた。

貳拾【決戦前夜】

僕は任務開始までの三日間、藤波さんだけでなくスノウ隊長、そしてコールマンさんにもみっちり鍛えてもらった。

それこそ寝る間もないほどに。

全世界の命運がかかっていると考えたと学校も行っている場合ではなかった。

虎徹と山脇も一昨日、昨日と学校を欠席して鍛錬に励んだ。

「よし、今日はここまでにしよう」

無傷のコールマンさんが時計を見て言う。

「えー。俺ucciまだまだ暴れ足んないよー」

「藤波ちゃん、明日は大事な日なんだから銀二君休ませてあげなきゃ」

不満そうに膨れ面な藤波さんをなだめるかのようにスノウ隊長が言った。

僕は今日、三人を一度に相手した。

正直死ぬ直前まで痛めつけられたが、虎徹の並外れた治療能力で傷を回復。

少し休憩の後、また死の瀬戸際。それを何回も繰り返した。

僕も最初の頃に比べると格段に強くなったと思う。

蛇王もそれなりに使いこなせるようになった。

しかしまだ戦闘ということに抵抗がある。

だって非現実的じゃないか。

しかし現実では本当にあることなのだ。

しかも化け物と。

時刻は午後六時四十二分。

いつもは藤波さんと日付が変わるまでシミュレートしていたが今日は明日が任務実行の日という事で早めに切り上げてくれた。

コールマンさんの配慮だろう。

藤波さんは満足していないようだったが。

僕はスタボロになった体を虎徹に任せ治療を施してもらっていた。

「お銀ってば今日は昨日以上にやられたねー」

虎徹は特殊な手袋をはめて僕の傷に手をかざす。

そうしているとなぜだか傷が癒えていくのだ。

おそらく治療に特化した特殊武器なのだろう。

みるみるうちに深い切り傷や骨折などの大怪我が治っていく。

「それ、すごいな」

「でしょ。オリチエさんからもらったんだ」

虎徹は自慢げにライムグリーンに光る手袋を見せてきた。

「よし、各自明日のために早く休むように。特に村雨はな」

コールマンさんはそう言ってシミュレート室を出て行った。

僕の傷も完全に癒え、部屋に向かう。

部屋に帰ると僕はシャワーも浴びずベッドに倒れこむ。

「はあー」

いよいよ明日か。

僕は自分の落ち着きようを不気味にさえ感じた。

毎日何回かムシについて分かった情報がメルに届く。

今日まで届いた情報を再確認しておくことにした。

今現在で分かっている情報はこうだ。

まずムシ界を統制しているのはLランクのムシ三匹。

その内の一匹が組織を仕切っている。

残りの二匹はどんな手段を使ったのかMランクから進化したムシだ。

普通MからLに進化することなどありえないのだが、

こちら側が推測するにおそらく総括している一匹のムシの仕業であ

ると。

それが組織の頭である一匹であろつ。

情報によるとそのムシは知能、戦闘能力どれをとっても過去にないほどの高さで、

他のムシとは全く異なる特殊能力も持ち合わせているそつだ。

僕は太の字に寝そべりながら目を瞑る。

（僕・・・本当に役に立つのかな・・・）

ため息をついた。

（戦うのは嫌だけど・・・世界が滅びるかもしれないし・・・）
お腹を掻く。

（それは困るしなあ・・・うーん・・・）

僕はあれこれ考えている内に夢の中へと導かれた。

決戦はいよいよ明日。

それぞれがそれぞれの想いを抱いている。

僕は・・・。

僕は戦う。

非現実的なものからこの現実を守るために。

武拾【決戦前夜】（後書き）

どうも、正宗です。

二十一部分、二十話目で初めて後書きを書きます。

とりあえず決戦まで一段落みたいな感じです。

次話からは決戦の火蓋を切って落とします。

つたない文章、誤字脱字多々あると思いますが、

広い心で読んでくださいます。感想随時待ってます。

【決戦：0】

さて、みんな。

いよいよこの時が来たね。

僕達の力を醜い人間どもに知らしめるんだ。

とりあえずは全世界を僕のものにする。

そのためにはみんなの協力が必要なんだ。

みんながすることはすっごく簡単だよ。

ただ人間を殺す。

それだけ。

でもただ殺すだけじゃだめだよ。

生気を根こそぎ吸い取らないとみんなも成長できないし。

カラカラになったら殺しちゃって。

とにかく僕のママとパパを殺した奴らが見つかるまで片っ端から殺して。

今から僕の記憶を見せるからそいつらの顔と声、覚えてね。

ほら、こいつらの顔。わかった？

よし。あと邪魔が入る気配がするから油断だけはしないでね。

邪魔するやつらは容赦なく殺していいからさ。

じゃ、みんな。

行っってきていいよ。

「さあ諸君よ。準備はいいかな？」

リーダーはいつも異常に髪型やらスーツやらをキメている。

しかし背が低い分それも半減した。

リーダーとオリチエさんは本部に待機しオペレート室で僕達に指示を送ってくれる。

「銀二くん、ネクタイ曲がってるよ」

そう言っ僕左側のスノウ隊長は、僕のネクタイを整えてくれた。僕は何だか照れくさく顔を逸らした。

「ギンギン、俺っちの特訓の成果が試されるな」

「そうですね」

スノウ隊長の横に藤波さん。

「村雨、まああれだけの技術ならMランクのムシは余裕だ。心配するな」

右側のコールマンさんが言った。

「俺だけでもいけそうな気がしますけどね」

コールマンさんの隣の山脇は言う。

「スノウ、どうだい？終わったら僕とデートでも」

「不謹慎ね。あなたもオリチエさんやリーダーと一緒に本部に残ったら？」

藤波さんを挟んでスノウ隊長と黒松さんが言い合う。

まだ全く関わった事がないリシオスさんは山脇の隣で腕組みをしている。

「さあ、行くぞ」

コールマンさんが一際低い声で言った。

途端にこれまでどこか気の抜けていた感があったみんなは瞬時に集中した。

コールマンさんはスキンヘッドな大男。そして図太い声。

さらにサングラスを掛け少し不精髭を生やしている。

山脇はいつものごとく赤髪、左耳にピアスをし煙草を銜えている。

ネクタイは極端に緩めである。

藤波さんは大きめのスーツを着てさらに幼く見える。

しかし片手には大斧・碎神を握り肩に担いでいる。

無口で近寄りがたいリシオスさん。

シャツの襟を立てている金髪の二枚目黒松さん。

はたから見ればこれほど近寄りにくい集団はいないだろう。

見方によればどこかのマフィアにも見受けられる。

しかし共通して言える事が皆が無言で神経を研ぎ澄ましている事だ。

僕もいちいち人の顔色を伺っている場合ではない。

拳を握り締める。

世界にとって、みんなにとって、僕にとって最大の戦いが始まる。

【決戦：1】

日の出の時刻を前に辺りはまだ薄暗い。

僕達は三班に別れて行動をとった。

まずはコールマンさんと山脇のA班。

次に黒松さんと藤波さんのB班。

そしてスノウ隊長、リシオスさん、僕のC班だ。

本部を中心にムシの出現が確認されている方角へと進んだ。

これまで本部からの東西南北どこでもムシが出現したが、

過去の除去記録を参考に、今日と出現日時が一番空いている南方へは進行しなかった。

A班は北の森林へ。

B班は東にある湖畔へ。

そして僕らC班は西の廃工場へ向かった。

僕らは目的地である西の廃工場へとたどり着いた。

そこは大手自動車販売会社の製造工場で、相次ぐトラブルの未倒産して今に至る。

桁違いの広大な敷地が地域住民の反感を買っていたらしい。

外壁にはツタが生い茂っていて、その下にスプレーで落書きされた跡がある。

僕らはその工場の大きな正門に立った。

正門から工場まではかなり遠い。

おそらくこのスペースは製造された自動車を置いておくためのものだろう。

『ここからムシの生態反応が見られるわん』

イヤホンからオリチエさんの不気味な声が聞こえた。

「了解。じゃ早速中に入るわ」

スノウ隊長はそう言って門を開け中に入った。

僕とリシオスさんもそれに続いて入る。

途端の事だった。

「右よっ！」

スノウ隊長がそう叫んだ。

右からは濃い緑色をした液体が飛んできた。

「うわっ！」

ベチャ

僕とリシオスさんは間一髪で避けた。

その液体が付着した地面はみるうちに溶けていった。

どうやら強い硫酸のような効果があるみたいだ。

すぐに受け身を取り液体が飛んできた右側に向き直る。

そこにはちゃんとした人間の姿があった。

ただし体格だけを除いては。

顔面の半分が焼け爛れたように黒く眼球はぶらさがっているだけの

身長が三メートルはあろうか巨人が佇んでいた。

「Sランクね。大丈夫、ゴミよ」

スノウ隊長はそう言って腰のポーチから何かを取り出した。

「スノウ隊長、それは・・・」

「これ？ふふ、あたしの武器よ」

そう言ってスノウ隊長は長方形の紙を取り出し指で印を結ぶ。

「召喚、炎虎えんこ！」

すると紙に文字が浮かび上がり、たちまち赤く燃える虎へと姿を変えた。

「す、すごい・・・」

「これがあたしの武器・・・武器っていうかお札ね」

スノウ隊長は自慢げに笑みをこぼした。

「さて、パパツとやっちゃって中に入りましょ」

隊長は素手で燃え盛る虎の額を撫でた。

隊長の手はなんともない。

虎は甘えるような声を上げた後に、一転して豪快に猛りムシに向かっていった。

発達した四肢で地面を蹴り瞬時にムシとの間合いを詰める。そして。

がああああ！

喉元に噛み付き、食いちぎった。

ムシは悲痛な唸り声を上げ丸太のような太い腕を振り回した。

迫り来る丸太を炎の虎はいとも簡単に避け各部位を噛み千切っていく。

やがてムシも両脚を噛み千切られその場に倒れこんで立ち上がれなくなっただ。

「そろそろね。時間がないからここで終わらせるわよ」

隊長はそう言うともた印を結んだ。

「炎虎、灼熱の世界を見せてあげなさい！」

すると虎はムシと一定の距離を取り大きく口を開き、火炎放射を繰り出した。

ごああああああああ！！

ムシは一際大きい唸り声を上げあつという間に蒸発してしまった。

コアも肉体と同時に焼き尽くしてしまったようだ。

「素晴らしいですね」

「まあこんなの序の口よ」

隊長はそう言って工場内部へ侵入すべく入口へ向かった。
僕もあっけにとられながらも隊長の後に続く。

【決戦：2】

そこは何百万本の木々が生い茂っていた。

この温暖化が進む現代でここは唯一森林が残されている場所の一つでもある。

それもそのはずだ。

自殺の名所とあって近寄るものは志願者以外には皆無だ。

ましてやそんな未恐ろしい場所の木を切ってマンションなんて建設してみる。

住人なんて一人もいない。

俺とコールマン隊長はぬかるむ足元を気にしながらも奥へと進む。

この森は雰囲気外界とは全く異質なものだ。

入口から一步足を踏み入れた瞬間、俺はその異質さに恐怖さえ感じた。

「気をつける。ここから先は足場が相当に悪い」

出っ張った太い枝をいともたやすく折りつつも隊長は前に行く。

確かに前を進むごとに足場は最悪になっている。

入口付近はまだ多少外気に触れていただけ足場は固まっていたが、

こう奥に進んでくるともう足首まで土に埋まっている。

足取りもだんだんと重くなっていく。

「隊長、ムシの気配は感じてるんですが姿が・・・」

「そうだな。入口からもう気配だけはずっと感じているんだがな」

俺たちは周囲を警戒しながらもさらに奥へと進む、

その一歩目。

「隊長！」

「くっ・・・数が多いぞ！」

異常なスピードで俺たちに近寄る殺気が五つ、いや六つか。

俺は腰の鞘に納めてある断月を手を伸ばす。

隊長は二丁のレールガンを構えた。

「ケタケタケタ。あれがニンゲンか」

「ケタケタ。どっちも不味そうだが、生気はたつぷりありそうだな」
猿のような姿をしたムシが五匹、俺と隊長を囲んでいる。

もう一つ強い殺気があるのだが姿は見えない。

とりあえずこの五匹のムシを倒す事にした。

「こいつら・・・」

「そうだな。Mランクのムシだが何やら雰囲気が違うようだ」

「なめてかかつちゃいけないっーことですね」

「そういうことだ！」

俺と隊長は一斉に駆けた。

まずはこれまでよく喋っていたこの二匹に焦点を定めた。

ぬかるむ足場のせいかいつものスピードは出ない。

俺が足場に気を取られていたほんの一瞬。

「ケタケタ。死ね」

俺のすぐ目の前に二匹が迫っていた。

「くっ・・・！」

ガギイイイン

金属と金属がぶつかり合う音。

俺はムシの攻撃を断月で防御したが、かすかに傷を負った。

相手は鋭い爪を武器としているようで俺は肩口に浅い切り傷を負った。

「・・・ちっ！」

「ケタケタ。こいつ遅い」

「ケタケタケタ。すぐに楽にしてやるよ」

明らかにこの二匹は俺より速い。

俺は断月を下段に構えムシたちの繰り出す攻撃をかわし続ける。

「ケタケタ。こいつ避けてばっか」

「ケタケタケタ。そろそろ終わらせる」

これまでのこいつらの攻撃パターンは決まっている。

一匹が攻撃したすぐあとにもう一匹が攻撃する。

同時に攻撃する事はないがもう一つ決定的にパターン化しているところがある。

それは列になって攻撃してくる事。

最初の攻撃の次は必ずその真後ろからもう一匹が姿を現す。

俺は徐々に攻撃を食らいながらもその時を待った。

「ケタケタ。死ねー！」

来た。

まずは一匹目が最高速度で俺に向かってくる。

俺は自分の持つ限界の速度を出し後方に飛ぶ。

確率は五分五分だ。

「はああああ！」

ある程度後退してから一転して一気に前進した。

「ケタケタ。その攻撃も見切っている！」

剣先をムシに向け突進する。

「ケタケタ。二匹まとめて串刺しか。無駄だ！」

ムシは避けた。

予定通りだ。

そのすぐ後ろのムシが姿を現す。

「ケタ！？ば、馬鹿！避けるな・・・！」

断月はムシの体を貫いた。

正面衝突で勢いよくムシの体突き抜けた。

「がはっ・・・！」

黒色をした不気味なムシの吐血が俺にかかる。

「ぐ・・・！」

最初に攻撃を避けたムシが血相を変えて俺に向かってくる。
いい気味だ。

俺は断月に刺さったままの屍をムシに放り投げた。
それと同時に間合いを詰める。

ムシは放り投げられた屍を避ける。

「よくも・・・！」

「ふふ」

「な、何！？いつの間に！」

俺はムシの目の前に現われてやった。

「・・・死ねばいいよ、お前」

「くそおお！」

頭の中から丁度二等分になるように断月を振り下ろす。

見事にムシは二分割され返り血が俺に浴びせられる。

肉を断つことほど気持ちいい事はないだろう。

断月も喜んでいる。

「ほお・・・なかなかやるんですね」

俺は今までにない殺気を感じ後ろを振り返る。

【決戦：3】

俺はこの上なく警戒しながら振り向いた。

「あなた方は・・・除去師ですね？」

そこには白装束に身を包んだ人間が立っていた。

いや、伝わってくる殺気からしてこいつは人じゃない。

俺たちが普段除去してきたムシだ。

しかし雰囲気が違うし、言葉を話す。

「菊之助！大丈夫か？」

残りの三匹を倒してきたコールマン隊長が少々傷を負いながらも俺に駆け寄る。

「隊長が負傷するなんて珍しいですね」

「ああ。想像以上にすばしっこくてな。それよりあいつは・・・」

俺と隊長は白装束のムシに目を移す。

「どうも、初めまして。私はギタンと申す者です」

ギタンと名乗るムシは丁寧にお辞儀をした。

すると俺の真横を閃光が通り抜けた。

隊長のレールガンだ。

バリバリバリ

電気の砲弾がギタンを直撃した。

「た、隊長」

「奴はムシには間違いない。隙を見せたほうが悪いのだ」
ギタンの周りは白煙が舞い上がりその姿は確認できない。

「あらあら、手荒い挨拶なんですね」

徐々に晴れていく白煙の向こうにはお辞儀をしたままの無傷なギタンが立っていた。

「何だと!？」

「き、効いてませんよ隊長！」

ギタンはゆつくりと顔を上げる。

「では、こちらにも挨拶し直さなければなりませんね」

そう言つて手のひらを俺たちの方へ向けた。

光が奴の手のひらに集まってい

く。「菊之助！避けるっ！」

「くっ・・・！」

ドンッ！

すると手のひらに集まった光が砲撃のように俺たちに向かってくる。

ドガアアア！

ぬかるんでいた足場は吹き飛び乾いた地面が顔を出した。

その威力は尋常ではない。

俺と隊長は咄嗟に避けたにも関わらず少しダメージを食らっていた。

「何だありや・・・」

「わからないがとにかく気を付けて反撃だ！」

「了解！」

俺と隊長は左右から攻撃をしかけた。

「ふふふ。威勢が良いですね」

隊長はギタンの右側から、俺は左側から間合いを詰める。

「これなんて、どうでしょうか」

ギタンは両手を広げた。

さつきと同じように手のひらを俺たちに向けた。

光が集まる。

しかしさつきの攻撃とは違う集まり方だ。

「避けられますか？」

ギタンがそう言うとも無数の光の矢が放たれた。

「うわっ！」

「ぐう！」

俺たちはその威力に大きく吹き飛ばされてしまった。体中は傷だらけになったいた。

左肩からはおびただしい量の出血がみられ激痛が走る。

「くっ・・・最小限のダメージに抑えようとしたが、ここは直撃したか」

俺はシャツの袖を破り傷口の止血に施した。

「おいっ！菊之助っ！大丈夫か！」

すると隊長がギタンの攻撃を交わしながらも俺の方へ近づいてきた。隊長はほとんどかすり傷で済んでいる。

「へへ、さすが隊長ですね。俺なんかほら・・・」

「だいぶ出血しているな。あまり動かない方がいい」

「そんなわけにはいきませんよ。奴を倒さなきゃ・・・くっ！」

立ち上がろうと両手に力を入れたが、やはり左腕は言う事をきかなかった。

「お前はここで休んでいろ。あとは俺が何とかする」

「でも隊長一人より俺も・・・」

「俺はお前の隊長だぞ」

隊長は親指を立て笑顔で言った。

しかしその笑顔もすぐに消えてしまった。

隊長の笑顔が一瞬にして苦痛に歪む。

俺の目の前にはスーツの上からでも分かるたくましい筋肉に包まれた隊長の胸がある。

その左胸からは鮮血に染まったギタンの手が現われている。

「隙を見せた方が悪い、でしたよね？除去師さん？」

俺の目の前、隊長の背後にはギタンが姿を現した。

「が・・・がはっ！」

隊長の大量の吐血が俺の顔に浴びせられる。

「た、隊長おお！」

ギタンは隊長の胸を貫いていた手を抜いた。
隊長は力なく俺に倒れ掛かる。

「隊長！しっかりしてください！」

「な、何とか大丈夫だ。それより早く奴を・・・」
まただ。

今度は隊長の右肩から奴の手が現われる。

その手は俺の腹部をもかすめていた。

「ぐあああ！」

「クスクス。やはり人間の悲鳴とはとても心地が良い」

ドス！ドス！

ギタンは何かを楽しむような笑みを浮かべ、なおも隊長の体突き刺している。

隊長は苦痛に顔を歪めながらも意識だけは留めている。

「もう・・・やめろおお！」

「何をおっしゃって。こんな楽しい事やめられるわけが・・・」

もう殺す。

俺は覚醒した。

「おや？ものすごい殺気ですねえ」

黙れ。

今すぐ貴様を殺すからまずその手を抜け。
貴様は塵になるまで斬る。

「はあああ！」

俺は気合だけでギタンを吹き飛ばす。

「ほお・・・少しはやりそうですね」

ギタンは笑みをやめた。

「隊長、すぐ終わらせますから」

「ぐ・・・菊之助、お前・・・なら、やれるぞ」

隊長は震えながらも親指を立てて見せた。

「隊長、除去して参ります」

俺は駆けた。

【決戦：4】

俺は三步でギタンとの間合いを詰める。

「死ね」

「無理ですね」

ガギイイン

断月はギタンの頭部を真つ二つにする、
はずだったが、奴は体の周りに薄く硬い膜のようなものを張り巡らし防御した。

「あなたの力じゃ私は斬れません」

「黙れ。とりあえず斬る」

頭部、みそおち鳩尾、延髄・・・。

俺は奴の急所という急所を切りつけた。

しかしそれも硬い膜で跳ね返されてしまう。

「ふふふ。ニンゲンとは愉快的な生き物なのですね」

奴が反撃する。

ほぼゼロ距離で例の光の砲弾を放つ。

俺は断月を盾にし防ごうとしたが多少ダメージを負った。

「・・・ちっ！」

「ふふ」

奴は嘲る様に笑った。

「ふんっ！」

俺は再び奴に接近する。

引き続き急所を狙い続ける。

「馬鹿の一つ覚えですか？無駄ですよ」

「ムシの分際で」

「ムシ？」

「ああ。貴様等のことを俺たちはムシと呼んでいる」

すると嘲笑していたギタンの表情が引きつった。

途端に俺は腹部に衝撃波を食らい吹き飛ぶ。

「ムシですか・・・いやですね。呼び方も気に入りませんし、何よりも

私をそこらにいる雑魚と一緒にされることが一番不愉快ですね」

奴の目つきが鋭くなり同時に殺気が倍以上に膨れ上がった。

「ふん。貴様は雑魚じゃない・・・」

大木にもたれていた俺は片膝をつき、それから立ち上がる。

「カスだ」

そう言った瞬間、俺の体から血しぶきが上がった。

何だ？

「駄目ですねえ。あなたは礼儀というものを知らない」

「くっ・・・生憎、挨拶とか社交辞令とか苦手なんでね」

傷を見るとビー玉くらいの大きさの弾丸が当たったような傷だった。

「まずはあなたには生き地獄を見てもらいましょうか」

そう言った奴の指先にそれぞれ光が集まる。

その光が指先に留まり、だんだんと球体を成していく。

指弾か。

「食らいなさい」

ビッ！ビッ！

ビー球程にまとまった光の球体がピストルの弾丸が如く俺に向かって放たれる。

それも命中すれば確実に致命傷になるであろう心臓や頭などの急所目掛けて。

だが俺には無駄だ。

俺はもう、常人ではないから。

全てを紙一重でかわし再び駆ける。

「死ね」

「あなたが死になさい」

これまで負ったダメージなど無いかのように俺は断月を振りかざす。

「私のバリアは全ての攻撃を無にする」

「いや、それでもなさそうだぜ？」

「何だと!？」

俺が捨て身になりながらも信じ続け攻撃した甲斐があったようだ。蓄積されたダメージがやつと目に見えて現われるようになった。

「くっ・・・私のバリアにヒビが!」

「そらよ」

断月を思い切り振り下ろす。

ブシューウウ

バリアを突破した断月の刃が奴の右腕を肩から切り落とした。

漆黒の鮮血が辺りを黒く染める。

「がああ・・・!」

ギタンは膝から崩れ落ちた。

これまで見せたことの無い苦痛に歪んだ表情で俺を睨む。

「甘く見ていたようだな」

「・・・ちっ!」

すると奴は瀕死の状態ながらも立ち上がり不敵な笑みを浮かべる。

「ふ・・・私は頭が良いほうなんでね・・・」

そう言っているとギタンは踵を返し遠ざかっていく。

「貴様っ!」

「ふふふ。このままではどう足掻いてもこちらの方が劣勢。」

よって一旦退かせて頂きますよ」

左手で止血しながら奴はどんどん遠ざかっていく。

俺は隊長の方へ目をやる。

虫の息ではあるが隊長は人間ではないからその分生命力も桁外れだ。ここは隊長を信じて奴を追うことにした。

「逃がさんっ！」

再び奴の方に向き直り追い始める。

「ふふふ・・・。オズ様、とっておきの材料をそちらに連れて行きますね。ふふ・・・。」

【決戦：5】

さすがに廃工場なだけあって中に明かりは皆無だ。昇りつつある朝日の光がかろうじて内部を照らす。僕は早朝ということもあって間抜けに欠伸をする。

「ちよつと銀二君、集中しなさいよ」

「あ、はい。すみません」

スノウ隊長は呆れたようにため息をつき肩を落とす。

「これが内部の構造。オリチエさんが事前に調べておいたそうよ」
隊長はポケットから工場の内部構造が詳細に描かれた紙を出した。生態反応が強く見られるのは最上階の三階らしい。

「リシオス、あなたも一応目を通しておいてちょうだい」

そういつて隊長はリシオスさんに紙を差し出した。

リシオスさんはそれを受け取って目を通している。

しかし目を瞑っている。

「あの・・・隊長。リシオスさんって・・・」

「ああ、彼は全盲なの」

「え・・・じゃあ構造とか分からないじゃないですか。それに今までの行動だって」

隊長は微笑む。

「ふふ。それは彼を見てれば自ずと答えが出てくるわ」

僕はなぜか本人にバレない様にリシオスさんに目をやる。

「・・・何だ」

「えっ！いや、何かすみません！」

リシオスさんと目があつた。

といつても相手は目を瞑っているが顔は僕の方を見ていた。かなり焦った。

というかりシオスさんって喋るんだ。

いや、そりゃ喋るか。

でも初対面の時あんなに無愛想だったから無口なイメージが。まてまで、今でも充分無口だしそれに最初に聞いた言葉が「何だ」だし。

挨拶も無視されたくらいだったし・・・

「銀二君、何してるの？奥へ進むわよ」

僕はあれこれ考えているうちに二人に置いて行かれた様だ。とりあえず考えるのをやめて二人に追いつこうと小走りになる。

一階。

主に大型のパーツを製造するためにそれに見合った大型の機械等が設置されている。

僕達はそのまま三階まで直行するつもりだったが、スノウ隊長がこの部屋に

何かを感じたらしく調べる事になった。

しかしその部屋は無駄に広く窓も全てカーテンで覆われていて余計に暗い。

「隊長、暗くて何も見えないんですけど、何かいるんですか？」

「・・・気配を感じたのよ」

「僕は何にも感じませんけど・・・」

僕はリシオスさんの方を見る。

するとリシオスさんは部屋の隅を指差している。

「え？」

ぼんやりと何かが見えてきた。

段々と目が慣れてくるとそこには小さな女の子がうつくまっている姿があった。

もちろん霊体である。

隊長がその子に駆け寄った。

「どうしたの？」

「・・・ほしいの」

「何が欲しいの？」

「・・・ほんもののからだがほしいの」

途端に少女から数十本の管が隊長目かけて伸びる。

「た、隊長！」

「ふふ、お見通しよ」

隊長は素早く後退し例の札を取り出す。

「じゃ今度はこの子ね・・・召喚、水熊^{みずぐま}！」

すると札は巨大な熊と化した。

しかもその熊は体が液体、つまり水で構成されている。

「さあ、思いつきり暴れてやりなさい！」

その声に水熊が反応する。

「ごおおお

唸り声を上げてムシと化した少女へと突進する。

「あはは、くまさん、くまさん」

少女は嬉しそうに笑い管を水熊に伸ばす。

水熊に全ての管が刺さる。

が、しかしその攻撃を受けていないかのように水熊は突進を続ける。

「その子に物理的な攻撃は無駄よ」

「じゃ水なら吸っちゃおっと」

「それも無駄ね」

「なんで？」

「その前にその子の攻撃があなたに到達するからよ」

「ど」ごおおお！

水熊の右フックを受けた少女はけたたましい音と共に壁に打ち付けられる。

少女はおぼつかない足取りながらも立ち上がった。

「・・・がは」

おう吐が始まる。

少女が黒い血にまみれた何かを吐いた。

「・・・おえ・・・ごぼ・・・」

それも立て続けにどんどん吐き出す。

「まずいわね・・・」

隊長に焦りが見える。

「何がですか？」

「ほら、増殖よ」

隊長の指差したそこには不気味に笑う少女が既に十体。

元の少女はまだ吐き続けている。

「き、気味悪いですね」

「そうね。とりあえずここは私が何とかするから銀二君とリシオスは上に向かって」

「え、でも」

僕は隊長に背中を力強く押された。

リシオスさんはもう部屋を出かけていた。

「すぐに私も行くから」

「じゃないと困りますよ」

僕と隊長はお互いに拳をぶつけ、後の合流を誓った。

「全く・・・水熊、炎虎、雷牛^{らいぎゅう}。パパッとやっちゃうわよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3734a/>

除去師

2011年1月5日14時16分発行